そして、空に帰る

野村
鈴木
女

舞台、舞台奥に横になれたりするようなソファー的なもの、客席側に、一人掛けの椅子が一脚置いてある

客入れ

客入れ、ラスト曲から、5秒間を置き、

音楽　ex. カノン
照明、曲終り30秒前から、10秒前に向けて、ゆっくりと暗転

1

野村の台詞のみを読む

野村　穏やかな秋の夜でした。
西側にある、僕の部屋の窓から見える夜空には、星と雲が絶妙なバランスで配置されていました。
…
星座に興味のない僕には、僕の窓から見える星達が、何の星座か知る由もなく、実際にそこには、何の星座も存在してなくて、名も無き星の群れが、絶妙な距離感で、ただそこにいるだけなのかもしれない。
…
この窓は、本当に僕の部屋の窓なのだろうか、それとも夜空という部屋の様なものの方に、取りつけられた窓なのだろうか。
夜空という部屋に絶妙な距離感で取りつけられた窓の中に、ただ僕がいるだけなのだろうか。
…
そう、そんなどうでも良い様な事を考えられる位、穏やかな秋の夜でした。
…
月はもう既に通り過ぎてしまったのだろうか、それともこれから通り過ぎようと待機しているのだろうか、そんなことを思ったりしたけれど、僕の窓から見える、その秋の夜空に、月は一切必要なく、その思いは、かすかに流れ込んできた、冷たい風と一緒に消えていきました。

…
思っては、消え。
想っては、消え。
僕の夜に残るものは何もなく、穏やかに見えるその夜空は、おそらく、僕の心を映しているだけのもので、僕が望んでいる世界なのだろう。
ただ静かに。
…
ただ静かに。
ただ独りで。
…
穏やかな（秋の夜でした。）

s. e.　何か大きなものが落下して衝突した音
照明、舞台全体
野村、驚き、戸惑い、唖然、呆然という様な感情が入り混じった感じで立っている

野村　何。

上空から何か（人的なもの）が落下してきて、野村の部屋の床に倒れている
屋根は壊れていない。
野村、そんな天井を見たり、その人的なものを見たり

野村　どういうこと。
え。
何で。
どうやって、落ちてきた。
落ちてきたんだよな。
…
どういうこと。

落下してきた人的なものが動く

野村　動いた。
鈴木　うーん。
野村　…

鈴木、起き上がり、野村と目が合う

鈴木　こんにちは。
野村　こんにちは。

鈴木、辺りを見渡す

野村　大丈夫ですか。
鈴木　…私ですか。
野村　そうですね。
今、ここには、僕とあなたしかいないので、僕が僕に「大丈夫ですか？」と言うのも変な話なので、…あなたです。
鈴木　はぁ。
野村　大丈夫ですか。
鈴木　何がですか。
野村　何がじゃなくて、すごい音がしたんですよ。
おそらく、落ちてきたんだと思うんですけど、…すごい音がしたんですよ。
鈴木　…落ちてきた。
野村　多分ですけどね。
天井は何とも無いんですけど、音的に、何かが…、あなたなんですけど、落ちてきた音がしたんですよ。
鈴木　はぁ。
野村　ですから、大丈夫かなと。
鈴木　それは、精神的な話ですか。
野村　肉体的な話ですね。
精神的なショックも確かにあるのかもしれませんけど、あれだけの音だったので、どこか折れてるとか。
鈴木　骨折。
野村　そう、骨折。

鈴木、立ち上がる

鈴木　それは、多分大丈夫ですね。
野村　でしょうね。
すっと普通に立ちましたもんね。

鈴木、辺りを見渡し、大きく息を吸う。匂いを嗅ぐ

野村　何をしてるんですか。
…
臭いですか。
僕の部屋、臭いですか。
鈴木　…
あぁ、いや、失礼。

そういう訳ではありません。
野村　いや、でも、すごい匂いを嗅いでいましたけど。
何か、気になる匂いとかがありますか。
鈴木　あ、いや、そうじゃないんです。
深呼吸。
ただ、大きく息を吸っていたんです。
野村　深呼吸。
鈴木　私は、落ちてきたんですか。
野村　…おそらく。
おそらく落ちてきたんだと思います。
突然、大きな音がしたんです。
何かと何かが衝突する音。
それは、僕の部屋の床とあなたの全身がぶつかった音。
ですから、僕の推測では、おそらく、あなたは落ちてきたんだと思います。
鈴木　…
野村　まぁ、さっきも言いましたけど。
鈴木　…
信じてもらえるかは分かりませんが。
そうだな、…簡単に言うと、私は、この世界の人ではないんです。
野村　この世界の人ではない。
鈴木　はい。
野村　…そうなんですか。
鈴木　まぁ、信じられないのも無理はないのですが。
野村　あ、いや、別にどっちでも良いですけど。
鈴木　そうなんですか。
あなたは珍しいくらい、冷静な人間ですね。
野村　別に冷静とかじゃないですよ。
いきなり自分の部屋に、知らない、人的な物が現れたんです。
驚いてますよ。
冷静でいるのは無理でしょう。
信じてるわけでは、ありません。
かといって、信じてないわけでもないです。
何て言えば良いのかな。
受け止めてるだけです。
おこがましいですね。上から言ってるみたいだ。
ただ、目の前で起こったことってだけなんです。僕にとっては。
鈴木　…
野村　分からないですよね。
鈴木　…
しばらく、ここに泊めてもらっても良いですか。

野村　…
すごいですね。
今の話の流れで、よく急に泊めてくれって言えましたね。
鈴木　私は行くあてがありません。
野村　そうなんですか。
まあ、そうでしょうね。
あなたの話だと、さっき急にこの世界の人になったようですし、行くあてはなさそうです。
…
良いですよ。
特に僕の生活に、何かするわけでもなさそうだし、適当にしてください。
鈴木　ありがとうございます。
野村　いえ。
でも、僕は、本当に、お構いできませんよ。
鈴木　もちろん。

野村、舞台奥の椅子に腰を掛ける
鈴木、辺りを見たり、腕をバタバタさせたり、大きく呼吸したり

野村　天使みたいな感じなんですかね。
鈴木　何がですか。
野村　いえ。
あなたの世界は、上にあるんですか。
鈴木　…
そうでもありません。
僕の世界は、あなたの世界と共にある様な感じです。
ただ、越えられない、破ることのできない薄皮と言えば良いのかな。
すぐそばにありながら、決して共にあることができない場所にある感じです。
野村　すぐそばにありながら、決して共にあることができない場所。
鈴木　はい。
野村　越えることができない、破ることのできない薄皮。
鈴木　はい。
野村　皮肉的ですね。
鈴木　そうなんですか。
野村　いや、僕の話です。
…
あなたは、我々人が言う、天使というか、そういう存在なのかもしれないですね。
鈴木　別に私は誰の使いでもありません。
野村　あなたが誰の使いでも関係ありません。
そう言った思想が必要なんです、我々人には。
鈴木　私は、あなたを導いたり、力になったりすることはできないと思います。

野村　導かなくても良いですよ。
言っただしょ。
そういう思想だけなんです。そういう風に想えることが大事なんです。
鈴木　…
野村　そうだ。
名前。
名前はあるんですか。
しばらくここに居るんです。あなたを何て呼んだら良いのかな。
まぁ、あなたでも良いんですけど。
鈴木　名前はあります。
私たちの世界です。私だけが存在しているわけではありません。
野村　そうですね。
僕だけが存在するなら、僕の呼称なんて、何の意味もない。
他の存在があるからこその、呼称です。
鈴木　はい。私は、鈴木です。
野村　…鈴木。
鈴木　はい。
野村　普通ですね。
鈴木　おかしいですか。
野村　あ、いや、おかしいわけじゃないんですけど、なんか、もっとこう、カタカナ的な感じを想像してたというか。
鈴木　カタカナ的。
野村　ガブリエルとか、何か、そういう感じの。
鈴木　…
野村　僕の勝手な思い込みですね。
鈴木　よくわからないです。
野村　鈴木さん。
鈴木　はい。
野村　…
僕は、野村と言います。
鈴木　野村さん。
野村　はい。
よろしくお願いします。
鈴木　よろしくお願いします。
野村さん。
野村　何ですか。
鈴木　何が苦しいんですか。
野村　…
鈴木　ずっと苦しそうな顔をしています。
野村　…

これが普通の顔ですよ。
…
もうすぐ夜が明けます。
僕は寝ます。
鈴木さんは、鈴木さんの好きなようにしてください。

鈴木　わかりました。

照明、ゆっくりと暗転に向かう

野村　あなたは何を知ってるんですか。

照明、暗転

2

音楽
照明、鈴木狙い
舞台上、鈴木が客席側の椅子に座っている
鈴木の台詞後、音楽はBGM的に流れている

鈴木　大きく息を吸ってみました。
たくさんの空気が、私の身体の中に入って来ました。
もちろん、空気が私の身体に入ってきたことが見えたわけではありませんが、確かにそう感じたんです。
…
身体の中に空気が入ってきて、身体の中に、すっと沁み込んでいきました。
確かにそう感じました。
…
空気には、匂いがありました。
空気には、硬さがありました。
昼の空気、夜の空気。
それぞれの匂いが、それぞれの硬さが、私を、とても心地よくさせてくれました。
何度も何度も、大きく息を吸ってみました。
たくさんの種類の空気を、私は楽しみました。
…
歩いてもみました。
街の人が歩いているように、少し急ぎ足で。
私から見える人たちは、どこかに向かって、少し急ぎ足でしたが、私には向かうべき所が無かったので、滑稽ですが、少しだけどこかに向かってるふりをして歩きました。
たくさん歩いたと思います。

少しだけ、走ったりもしました。
…
足の裏が、痛くなりました。
足の裏だけじゃない、ここも（ふくらはぎ）、ここも（もも）、色んなところが痛くなりました。
…
面白いんですよ。
歩いてる時は一切気付かなかったのに、歩くのを止めて、少してから初めて気付くんです。
ああ、足の裏が痛いなって。
色んなところが痛いなって。
…
街の人は、たくさん歩いていました。
いつか、どこも痛みを感じることもなく、歩くことができる様になるんですかね。
まあ、それはそれで寂しい気もしますが。
…
ぼちぼち、あなたが起きる時間ですね。
あなたは、他の人と違って、昼の間はほとんど寝ていて、夜に起きています。
そして、ほとんどこの部屋から出ることがありません。
私は、そんなあなたに興味を持っています。
今日は、どんな話が聞けるんでしょう。
…
そうだ、急いで歩いたり、走ったりしてると、大きく息を吸うことが難しいことが分かりました。
発見です。

8

照明、暗転

野村　それは発見なんかじゃない。
大きく息を吸ってることに気づいてないだけだよ。
そう、気付いてないだけなんです。

音楽、F. O.

野村の台詞のみを読む
照明、舞台全体
野村、立って、鈴木に向かって話している。（話の途中からのイメージ）

野村　大体ね、人が生きてることに意味なんて何もないんですよ。
鈴木　そうなんですか。
野村　あると思いますか。
鈴木　私には、分かりませんが、
野村　人だけじゃない、地球上の生物全部って言ったって良い。
だって、そうでしょ。
目的がない。
鈴木　みなさん、それぞれに目的を持って生きてるんじゃないですか。
野村　じゃあ、目的ってのは何だと思いますか。
出世。有り余る金。結婚。幸せな家庭。支配。穏やかな時間。
それは欲望でしょ。
そんなのは、人が生きていく目的じゃない。
人が生きていく上で抱く、単なる欲望じゃないですか。
…
人はなぜ生かされてるのか。
なぜ生きていかなければいけないのか。
何のために、我々は存在しているのか。
…
我々の存在にね、意味なんて何もないんですよ。
鈴木　申し訳ありません。
私には意味が分からないです。
鈴木　僕は想うんです。
ただ生命があるだけなんです。
ただここに、生命があるだけなんです。
何の意味があって、生命があるんだと思いますか。
一定の時間が経過すれば、死を迎えるだけなのに。
死ぬために、我々は生まれるんですか。
鈴木　そうとも言えるのかもしれませんね。
野村　鈴木さん、神はいるんですか。
鈴木　分かりません。
野村　神とは何ですか。
鈴木　分かりません。
野村　鈴木さんは、神を見たことがありますか。
鈴木　おそらく、無いと思います。
野村　おそらく。
鈴木　神がどういったものか、知らないので。
野村　確かに。確かに、そうですね。
鈴木さんと待ち合わせをしてても、鈴木さんがどんな人か分からなければ、ひょっとしたら、隣に立っている人かもしれないし、気付かずにすれ違ってしまうかもしれない。
神が、私が神ですって、カードを持って立ってれば良いんですけどね。

鈴木　でも、それはあり得ないですよね。
野村　そう、あり得ない。
そもそも、神が人型なのかもわからない。
イヌかもしれないし、ネコかもしれない。
ライオン、象、カエル、蛇。
そういう形かもしれない。
鈴木　そうですね。
野村　樹木かもしれない。
鈴木　はい。
野村　僕は無宗教です。
いや、違うな、無信仰です。
ですが、神だったり、そういった、自分が救われる存在を、心のどこかで信じています。
いや、違うな、信じてるんじゃなくて、願っています。
期待してるんです。
鈴木　大概の人がそうだと思います。
野村　そう。
無信仰なのに、神的な存在を期待するんです。
都合のいい話ですよね。
鈴木　私はそうは思いません。
野村　汚いですよね。
鈴木　そんなことはないと思いますよ。
野村　信仰心の強い人は、神の存在を感じることはあるんでしょうか。
いや、感じるじゃ弱いな。
信仰心の強い人は、神を見たことがあるんでしょうか。
鈴木　どうでしょう。
野村　信仰心の強い人は、実際に神に救われるんでしょうか。
鈴木　分かりません。
野村　そういった人たちにとっての、救いとは一体どういうことなんでしょうか。
自分の欲望が叶うこと。
宗教上の教えに則った、信仰者だけの平和。
天国へ行くこと。極楽浄土へ行くこと。
…
神を信じてれば、幸せに死ねるんですか。
鈴木　分かりません。
野村　神を信じていない人には、不幸な死しかないんですか。
鈴木　そんなことはないと思います。
野村　そう、幸せも不幸も何もない。
死は、死です。
死ぬことに、神なんて関係ない。
単に生命活動の停止です。

鈴木　そうかもしれません。
野村　それなら、なぜ、人は、全ての生物は、死ぬのに、生きなければいけないんでしょうか。
でもね、僕は思うんです。
人以外の生き物に関して言えば、循環だったりで、地球のバランスという因果が存在するんですよ。
餌になったり、土になったりとか。
人は、その循環においても、無意味な存在でしかないと思いませんか。
せっかく他の生物の死を含めた循環のバランスを崩すような存在だと思いませんか。
行き過ぎた文明の発展は、どこに恩恵を与えるんですか。
人の便利の追及は、誰を便利にしたんですか。
我々、人だけが、無意味で無駄な存在だと思いませんか。
鈴木　…
野村　…
鈴木　そんなことはないと思いますよ。
野村　なぜ。
鈴木　分かりません。
…
ですが、そこまで否定する必要もないと思うんです。
野村　否定してるんじゃないんだよ。
何で分からない。
否定じゃないんだよ。
事実なんだよ。
鈴木　…
野村　僕は事実を言ってるだけなんだよ。
鈴木　…
きっと意味はありますよ。
生きてる意味。
存在する意味。
野村　どんな意味があるんですか。
どんな存在意義があるんですか。
せいぜい排泄物ですよ。
小便なんですよ。
うんこなんですよ。
地球の排泄物なんですよ。
地球の、地球上に存在する意識の排泄物が形作られたもの、それが僕たちなんですよ。
鈴木　…
野村　…
鈴木　私はそうは思いません。
野村　…ありがとうございます。
鈴木さんは、いつも僕のことを否定してくれます。

鈴木　自分の思ったことを言ってるだけです。
野村　それが嬉しいんです。
　　例え否定だとしても、鈴木さんの意見を言ってくれる。
　　それが嬉しいんです。
鈴木　意見なんて、大したものじゃありませんよ。
野村　意見ですよ。
　　鈴木さんの信念に基づいた考えの言語化。
　　それは、紛れもなく意見です。
鈴木　…
野村　僕は、言えませんでした。

野村、置時計若しくは壁掛けの時計を見る

野村　もうこんな時間ですね。
　　今日も、たくさん喋ってしまいました。
鈴木　楽しかったです。
野村　感情的になってしまいました。
鈴木　別に構いませんよ。
野村　どうして、僕の話を聞いてくれるんですか。
鈴木　特別な理由はありませんが、楽しくはあります。
野村　楽しいですか。
鈴木　ええ。
野村　まるでカウンセリングをされてるみたいだ。
鈴木　そんなことはありませんよ。
野村　…
鈴木　聞いて良いですか。
野村　どうぞ。
　　何でも聞いてください。
鈴木　あなたは、昼に寝て、夜に起きてます。
　　それは、普通の人たちと逆です。
　　どうしてですか。
野村　そうですね。
　　僕の生活は、普通の人とは逆ですね。昼に寝て、夜に起きる。
　　特に意味はありませんよ。
　　夜の方が哲学的になれる。
　　それ位です。
鈴木　…
野村　なぜ、人は死ぬのに、生きなければいけないんでしょうか。
　　生きることの目的は、死なんですよ。

照明、ゆっくりと暗転に向かう

鈴木　…
野村　…
哲学的でしょ。

野村　僕は寝ます。
おやすみなさい。

照明、暗転

4

音楽
照明、鈴木狙い
舞台上、鈴木が客席側の椅子に座っている
鈴木の台詞後、音楽はBGM的に流れている

鈴木　今日は公園に行ってきました。
名前も無いような、小さな公園です。
名前も無いような、小さな気持ちが、そこにはたくさんありました。
私は、その公園がとても気に入りました。
公園の半分を囲むように、不規則な間隔で、大きめの木が生えていました。
何という名前の木かは分かりませんが、程よい存在感で、程よい木陰を作っていました。
木の葉が緑と赤に染まっていて、とても綺麗でした。
緑と赤が、ちょうど良いバランスで混じっていて、全部が真っ赤に染まっても美しいのでしょうが、私は、今日のそれぞれの色が入り混じっている位が一番好きかもしれません。
…
私は、そんな木の下に配置されているベンチの一つに座りました。
足元には控えめに枯れ葉があって、踏むとカサカサと乾燥した音がしました。
私は確かめるように、枯れ葉を踏みました。
カサカサ。
カサカサ。
カサカサ。
やはり、枯れ葉が発する音は、カサカサと乾燥した音でした。
…
そんな私を不愉快に思ったのか、足が長く、ほっそりとした、小さめの蜂が私に向かって飛んできました。

蜂の羽音は、自らの生命を誇示するかのように、とても瑞々しく聞こえました。
蜂の小さな体からは想像もつかない、強くて、満ちている音でした。
…
いつの間にか、子どもたちが、楽しそうな声を発しながら走り回っていました。
名前も無いような小さな公園は、更にカラフルな色彩を放ち始めました。
何が楽しいのか、私には理解できませんでしたが、心からの楽しそうな声と、心からの楽しそうな笑顔は、周囲の人の心に彩りを与えてくれていた様に思います。
楽しそうな声も、楽しそうな笑顔も、子どもたちそれぞれに特徴があって、そんな子どもたちを、私は一人一人ゆっくりと眺めていました。
…
その内に、子どもたちは公園からいなくなり、交代するように、大人たちが昼ご飯を持ってきて、ベンチに座って食べていました。
先ほどとは違って、楽しそうな声は聞こえてきませんでした。
青い空には、控えめに雲が浮かんでいて、暖かい陽射しと、冷たさを含んだ、少し強めの風が吹いていました。
私は、立ち上がり、その公園を後にしました。
…
知らない家の前の、知らない葉っぱの上に金色のカエルが、寒そうにたたずんでいました。
何となく可哀想に思えたのもあって、しばらくの間、私はそのカエルを見ていました。
カエルは20分くらいかけて、葉っぱと同じようなくすんだ緑色に、ゆっくりと変わっていきました。
何となく不憫に思い、カエルを葉っぱから違う場所に移そうと思いましたが、カエルが軽く鳴いたので、私は手を引っ込めました。
…
カエルが鳴いてから程なくして、ぽつぽつと雨が降ってきました。
雨の後の空気は少し重くなったように思えました。
空気に実質的な重さはないのかもしれませんが、外を歩いている人の足取りが、重くなったように感じました。
空気に重さはあるのだと、僕は思います。
これは、発見といえますかね。
おそらく、あなたは否定しますね。

照明、ゆっくりと暗転に向かう

鈴木　私の声は、あなたに届いているのでしょうか。
できれば、届いて欲しかった。

照明、暗転
音楽、F.O.

野村の台詞のみを読む
効果、スモーク
照明、ゆっくりと暗め
野村、ソファーに座り、西側の窓を見ている

野村　月も星も見えない夜は、人を孤独にさせます。
鈴木さんは、どうしようもない孤独な夜を経験したことがありますか。

野村、がばっと立ち上がる

野村　…鈴木さん。
…違う。
鈴木さん。
…
何で。
女　私の声が、聞こえてますか。
野村　…聞こえてるよ。
女　私の声だって、すぐ分かった。
野村　もちろんだよ。
君の声を、僕が忘れるわけがないだろ。
女　ありがとう。
野村　どこに行ってたの。
女　ちょっとね。
野村　ちょっとって、どこだよ。
何で急にいなくなったの。
女　ちょっとね。
野村　声は聞こえるんだど、君の姿が見えないんだ、…、
どこにいるのかな。
女　ここにいるわ。
野村　ここって、どこ。
女　ここにいるでしょ。
野村　ごめん、本当にわからないんだ。
君の姿が見えないんだ。
女　あなたの目の前にいるでしょ。
野村　目の前？
僕の目の前に君はいない。
女　私はあなたの目の前にいるわ。
野村　…

君も鈴木さんと同じように、僕の傍にはいるけど、ここじゃない世界に行ってしまったってことかな。

女　鈴木さん？

野村　鈴木さんを知らない。

女　知らないわ。

野村　そうか。

鈴木さんは、最近、この部屋に来た、…、何て言えば良いんだろう、…、

人の形をした、いや、ほぼ人と言える、…人だと思う。

そんなことはどうでも良いか。

女　私はあなたの目の前にいるわ。

野村　嘘だ。

君は僕の目の前にはいない。

僕には、君の姿が見えないんだ。

女　そんなことはないわ。

あなたが、私を見ないだけ。

野村　それはどういうこと。

僕が君のことを見ようとしていないってこと。

女　そう。

野村　そんな訳ないだろ。

君の方が、突然、僕の前から姿を消したんじゃないか。

女　私はずっとここにいたわ。

野村　だから、「ここ」ってのはどこなんだよ。

僕の目の前には君はいない。誰もいないんだよ。

それは、紛れもない事実だ。

女　事実。

野村　そう、事実。

女　あなたにとって、事実は、目に見えるものだけなの。

野村　…いや。

女　あなたは目に見えないものは、一切認めないということなの。

野村　そうじゃない。

女　私の想いも、無いものなの。

野村　ごめん、そうじゃないんだ。

女　私とあなたは魂で繋がってるんじゃないの。

野村　その通りだよ。

ごめん、僕が悪かった。

女　あなたの想いも、本当は存在しないものだったの。

野村　そんなことはない。

僕の想いも、君の想いも、疑いようがなく、そこに存在していた。

そう、それも紛れもない事実だ。

…

でも、君の姿が見えないんだよ。
目の前にいると言う君が、僕には見えないんだよ。
女　私はここにいるわ。

女の台詞が、違う方向から聞こえる
野村、違う方向に向かう

女　こっちよ。
野村　…
女　そっちじゃない、こっちよ。
野村　…
女　だから、こっちよ。
野村　僕をからかってるのか。
女　こっちよ、こっち。

最終的に、西側に存在する窓の前に立っている

女　そう。
野村　君はいない。
女　何が見える。
野村　窓が見える。
窓の外には、夜の空が見える。
いや、分からない。
暗くて、月の明かりも、星の瞬きもない。
それが空なのかも、もはや僕には分からない。
…
カエル。
女　…
野村　カエルがいる。
カエルは窓の外に張り付いてるのか。
部屋の中にいるのか。
女　それが私よ。
野村　は。
女　私よ。
野村　ちょっと待ってくれ。
何を言ってるんだ。
僕の目に映ってるのは、アマガエルだけだ。
君じゃない。
女　私よ。

以下、野村と女の台詞を両方読む

野村　僕の目に映っているのは、君じゃなくて、アマガエルなんだ。
女　そう、だから、それが私よ。
野村　分からない。
分からない
分からないよ。
どういうこと。
女　覚えてない？あなた、昔、私にカエルの図鑑を見せてくれたでしょ。
野村　…
女　その図鑑に載ってた、真っ青なアマガエルを覚えてない？
野村　覚えてる。
真っ青なアマガエル。
君はとても興味を持っていた。
女　そう。
とても綺麗だった。
ねえ、何でこのアマガエルは、こんなに綺麗な青なの。
野村　アマガエルはさ、黄色と黒と虹色の色素を持ってるんだけど、このアマガエルは、黄色の色素が欠損してて、青に見えるんだよね。
女　虹色の色素って。
野村　まぁ、そうだな、光を反射して、何色にでも見せることができるって感じかな。
女　素敵ね。
野村　青いのは、黄色の色素がない、アルビノみたいなものだって考えれば良いんじゃないかな。
女　そう。
そうやって、あなたは私に説明してくれた。
私思ったの。
何かを失えば、あの青いカエルの様になれるんじゃないかって。
いや、あの青いカエルになりたいって思ったの。
…、いや、なんでも良かったの、私じゃなければ。
私は私でいることに疲れてたの。
野村　カエルになろうと、ネコになろうと、何になったとしても、自我がある以上、君は君じゃないか。
女　そう。
何になろうと、私は私。
カエルになろうと、ネコになろうと、私は私よ。
疲れたままの私よ。
ねえ、今でも私のことを好き？
野村　…もちろん。

照明、様々な色にゆっくりと変化

女　でも私は変わってしまった。
野村　どんなに変わってしまったとしても、僕の気持ちは変わらない。
女　私が変わったの。
あなたが変わらないことは関係ないの。
私が変わってしまったの。
私は変わりたかったの。
野村　何に。
女　何かに。
何でも良かったの。
私じゃなければ、何でも良いの。
私じゃない何かに。
野村　そんなの無理だよ。
女　そう。何になっても私は私。
でもね、分かったの。
野村　何を
女　人は何にでも成れるって。
野村　カエルにも。
女　そう。
野村　人はカエルには成れないよ。
女　でも、あなたは今、カエルの私と話してる。
野村　僕は今、カエルの君と話してる。
女　人は何にでも成れるの。
野村　：：
女　あなたは何になりたい。
野村　分からない。
女　あなたはあなたのままで良いの。
野村　分からない。
何故君は、君じゃない何かに成りたかったの。
女　あなたが見せてくれた、あの図鑑の青いカエルを、ふと思い出したの。
野村　だから、何故君は、君じゃない何かに成りたかったの。
女　知ってた。
青いカエルは、幸運のカエルって呼ばれたりしてるのよ。
野村　だから、何で君は、
女　知ってた。
青いカエルも、しっかりと栄養を取ると、緑の普通のカエルになったりするって。
でもそれって、もう幸運のカエルじゃないってことよね。
野村　：：
女　ねえ。
私は今、何色のカエル。

あなたに私は、何色に見える。
野村　…
緑色だよ。
女　嘘よ。
野村　…
女　ごめんなさい。
大きな声出して。
野村　…
女　ねえ、本当なのよ。
本当に人は何にでもなれるの。
あなたにも。
野村　君が僕になったら、僕は僕じゃなくなるのかい。
女　あなたはあなたのままよ。
野村　それじゃあ、君が僕になるってことは、僕と君は一つになるってこと？
女　そう。
いや？
野村　嫌じゃないよ。
でも、少し寂しい気持ちはするよ。
女　どうして。
野村　僕は、君との他愛もない会話を、とても楽しんでいたし、
君とする食事をいつも楽しみにしていたし、ささいな口論ですら楽しく思えて
たから、
君が僕になって、僕らが一つになってしまったら、僕はどこで君を感じれば良いんだろう。
女　私と一つになりたくないの。
野村　そうじゃないんだ。
女　だったら、
野村　そうだ、教えてくれないか。
今まで君は、カエル以外の何かに成ったことはあるの？
女　色んなものに成ったわ。
野村　興味深いな。
女　土になったわ
野村　土に。
女　水にもなった。
野村　水に。
女　鳥に成って、大空を羽ばたいたわ。
野村　それは気持ちが良さそうだ。
女　蝶になって、ひらひらと花の周りを舞ったりもした。
クモの巣に引っ掛かりそうになった時は、本当に恐ろしかったわ。
野村　気をつけないと。
君は何かに夢中になると、周囲が見えなくなりがちだから。

女　そうね。
色んなものに成った。
野村　君以外の何かに。
女　ええ、私以外の何かに。
野村　不思議だ。
もう君は君じゃないのに。
目の前のカエルが君にしか見えなくなってきたよ。
女　当たり前でしょ。
あなたの目の前のカエルこそが、今の私なんだから。
野村　そうだったね。
女　そして、もうすぐ私たちは一つになる。
野村　…、君は僕になる。
女　嫌？
野村　嫌じゃないよ。
でも、いつの間に君は、そんなことができる様になったんだろう。
女　知ってるでしょ。
野村　知らないよ。
いつから。
女　あの時から
野村　あの時？
女　そう、あの時。
野村　いつ。
女　あの時。
野村　だからいつ。
女　…
野村　…
女　死んだ時。
知ってるでしょ。
私が死んだ時よ。

照明、暗転（カット）

6

音楽
照明、鈴木狙い
舞台上、鈴木が客席側の椅子に座っている
鈴木の台詞後、音楽はBGM的に流れている

鈴木　あなたは子どもだった頃、あなたは自分を子どもだと思っていました。

あなたは子どもだった頃、あなたは自分を大きな存在だと思っていました。
あなたは子どもだった頃、この世は一つのものだと思っていました。
あなたは子どもだった頃、いつかは大人になると思っていました。
…
あなたが大人になった頃、あなたは自分を大人だと思いました。
あなたが大人になった頃、あなたは自分を小さな存在だと思いました。
あなたが大人になった頃、あなたは一つになりたいと思いました。
あなたが大人になった頃、あなたは大人になっていなかったと思いました。
…
湧き水が小川になり、小川は川になり、川は海になる。
それも一つのこと。
空に白い雲が浮かび、白い雲を追い払うように黒い雲が空を支配し、雨を降らす。
それも一つのこと。
あなたが生まれ、親に愛され、誰かを愛し、子どもを愛し、子どもに愛される。
それも一つのこと。
…
私はずっとあなたの傍にいました。
私はずっとあなたたちの傍にいました。
あなたたちの喜びが、達成感が、哀しみが、絶望感が、羨ましかった。
…
あなたはずっと苦しい顔をしていました。
そして、それが何故なのか、私は知っています。
私はあなたに手を差し延べようと思いました。
ですが、私の手は、あなたに届くことはありません。
…
すべてが遅かったようです。

照明、暗転に向かう

…
私は今まで、ここでは無い世界で生きてきました。
ですが、私は、今ここで生きています。
そしてそれは、

照明、暗転
音楽、F.O.

野村の台詞のみを読む

照明、舞台全体
舞台上、野村がベンチに座ってうなだれている

野村　夢を見ていました。
鈴木　うなされていましたよ。
野村　そうですか、うなされてましたか。
鈴木　はい。
野村　どんな夢だったんですか。
鈴木　他愛もない夢です。
野村　何か言ってましたか。
鈴木　特には。
野村　そうですか。
鈴木　聞いて良いですか。
野村　はい。
鈴木　どうしてあなたは、あなたの世界から、こっちの世界に来たいと思ったんですか。
野村　憧れですかね。
鈴木　憧れですか。
野村　はい。
鈴木　理解できませんか。
野村　僕には理解できませんね。
鈴木　この世界の、一体どこに憧れる要素があるんでしょうか。
野村　その辺は、人それぞれだと思います。
鈴木　確かに、僕はあなたじゃない。
野村　感情なんて、人それぞれです。
鈴木　ええ。
野村　誰かを好きなったことはありますか。
鈴木　今のところ、そう感じることはありませんね。
野村　人を好きになることは、幸せなことだと思いますか。苦しいことだと思いますか。
鈴木　どうでしょう。
野村　幸せなことなんじゃないでしょうか。
鈴木　違います。
野村　苦しいことなんですか。
鈴木　違います。
野村　両方です。
鈴木　幸せなことであり、苦しいことでもあります。
野村　複雑ですね。
鈴木　ええ、複雑です。
野村　それでも、あなたは誰かを好きなりますか。
鈴木　どうでしょう。
野村　なりますよ。

鈴木　…
野村　それが人ですから。
鈴木　…
野村　あなたは人ですか。
鈴木　正直なところ、よくわかりません。
野村　きっと、あなたは人ではないと思います。
鈴木　それは、私が誰のことも愛していないから。
野村　いえ。
なんとなく、そう感じるだけです。
意地悪な言い方ですね。
鈴木　…いえ。
野村　彼女が死にました。
鈴木　そうなんですか。
野村　はい。
鈴木　何故。
野村　理由は分かりません。
独り、自分のベッドの上で、静かに死んでいました。
…
今日は、彼女のことを話しても良いですか。
鈴木　是非。
野村　ありがとうございます。
鈴木　いえ。
野村　2年前の春から、彼女は仕事で、地方に転勤になりました。
彼女は、今までと違う場所で暮らすことを、それまでより少しだけ責任のある仕事を任されたことに、軽く興奮していました。
そして、そんな充実した生活を、僕にメールで伝えてくれていました。
僕も、それまでより責任の重い仕事を任されることになり、二人の実際の距離が、一緒に過ごす時間を減らしていきました。
それでも、毎日のメールのやりとりで、我々の心の距離は、実際の距離ほど離れていないと僕は思っていました。
…
でも彼女は、その日突然、何の前触れもなく、死を選びました。
…
第一発見者は、僕でした。
その日は、1年振りに彼女と会う日でした。
彼女の住む町で会うことにしていました。
午前中に家を出て、午後には彼女の家に着く予定でした。
ですが、僕に急な仕事が入ってしまい、何とか昼前くらいにこっちを発って、夕方前くらいに彼女のところに着くことになってしまいました。
それでも、僕は楽しみにしていたし、彼女も楽しみにしていたと思います。

少なくとも、前日のメールからは、楽しみにしている様が十分に伝わってきました。
夕方前くらいには、彼女の住む町に着き、彼女に連絡しましたが、彼女からは、何の連絡も返ってきませんでした。
多少、おかしな気もしましたが、忙しくしていたことも聞いていたので、僕同様、急な仕事が入ったのかもしれないし、疲れて昼寝をしているのかもしれない。
それ位で思っていました。
合鍵も持っていたし、自分で彼女の家まで行けば、何の問題もないことです。
家に向かう途中、夕食の材料と、彼女の好きな白ワインを買いました。
そして、彼女の家に着き、鍵を開け、中に入りました。
玄関には、普段彼女が履いているであろう、スニーカーが綺麗に置かれてあり、直感的に彼女は家の中にいると確信しました。
多少の違和感は引き続きありましたが、それ以上に久々に彼女に会えるという気持ちが勝っていたんです。
僕は彼女の寝室のドアを開けました。
予想通り、彼女は寝室のベッドの上にいました。
ですが、そこから先は、僕が予想していたものとは、まるで違うものだったんです。
彼女は寝室のベッドの上に、静かに、仰向けの状態で寝ていました。
静かに、死んだように。
軽く声をかけましたが、彼女が僕の声に反応することはありませんでした。
…
だって、死んでいたんですから。
…
どれ位そこにいたのかは覚えていません。
どうしていたのかも覚えていません。
誰かに色々話を聞かれましたが、それもまるで覚えていません。
だって、一番話を聞きたいのは、僕の方じゃないですか。
…
遺書はありませんでした。
…
少し後になって知ったのですが、彼女は半年ほど前から、不眠に悩まされていたようです。
もちろん、僕は知りませんでした。
彼女の部屋に、睡眠導入剤が置かれてあったそうです。
彼女は摂食障害も患っていたのかもしれません。
痩せたという、喜びのメールが送られてきてはいましたが、ベッドの上の彼女は、喜んでいいような痩せ方ではありませんでした。
知らない土地で、孤独の中、様々なストレスを抱え、心を患っていたのかもしれません。
今となっては、知る由もないですが…。
…
そうだ、部屋が綺麗だったんですよ。
本当に綺麗だったんです。

どちらかと言えば、そういう部分は、ずぼらなタイプなんですよ。
洗い物もシンクに溜めがちだし、掃除もそんなにこまめにする方じゃない。
埃一つなく、全てが整って配置されていて、そこには生命が感じられなかったんです。
…
何故彼女は、僕が第一発見者になるように死んだのでしょうか。
何故彼女は、僕が来るのを待ってくれなかったんでしょうか。
…
彼女が死んだのは、深夜4時から5時の間だったそうです。
彼女は、そもそも僕のことを待っていなかったんです。
急いで仕事を片付けて、新幹線に乗ったとき、彼女はもう、死んでいたんです。
鈴木　だから、あなたは毎日夜に起きているんですか。
野村　ええ、彼女がどんな夜を過ごし、何を考え、深夜4時から5時の間に、何故死ぬと言うことを決断したのか。
そのことをずっと考えていました。
鈴木　分かりましたか。
野村　何も分かりませんでした。
考えても考えても、僕には何も分かりませんでした。
…
鈴木さん。
鈴木　何ですか。
野村　死んだら、僕は彼女に会うことができますか。
鈴木　できません。
野村　どうしてですか。
僕も死んだら、彼女に会えるでしょ。
鈴木　無理です。
野村　何でですか。

8

以下、両方の台詞を読む

鈴木　死んだのはあなただから。
野村　…。
鈴木　死んだのはあなたですから。
彼女に会うことはできませんよ。
野村　何を言ってるんですか。
鈴木　死んだのはあなたで、
悲しみに暮れているのは、生きている彼女です。
野村　違う。
死んだのは、彼女だ。

だって、僕は見たんだよ。
ベッドで死んでた彼女を。

鈴木　ベッドで死んでいたのは、あなたです。

野村　違う、ベッドで死んでたのは、僕じゃない。彼女だ。
死んだのは彼女だ。

鈴木　…それは君の妄想です。

野村　僕の妄想。

鈴木　そう、君の妄想。
君の、独りよがりの妄想です。

野村　僕の、独りよがりの妄想。

鈴木　…

野村　僕は死んだんですか。

鈴木　あなたは死にました。

野村　何故。

鈴木　何故。

野村　僕の心が死んだから。

鈴木　そう。
君の心が死んだから。

野村　…
僕の心がね、死んじゃったんです。
どこにも行けない僕が、
どこにも行けない僕の心が、
ゆっくりと、ゆっくりと、
いつの間にか、死んでたんです。
…
その日も眠れなかったんです。
薬を飲んでも、一向に眠気が来なかったんです。
…
見せたくなかった。
僕を見せたくなかった。
…
穏やかな夜だったんです。
星と雲が絶妙なバランスでね。
窓を開けました。
冷たい風が入ってきてね。
空が僕を呼んだんです。
穏やかな夜に、空が僕を呼んだんです。
…

野村、舞台中央に立つ

照明、狙い

彼女は今、どうしてるんでしょうか。
鈴木　あなたが知る必要はありません。
野村　…
そうですね。
鈴木　死んだのは、あなたですから。
野村　はい。
死んだのは、僕です。

音楽
照明、ゆっくりと暗転に向かう
野村、ゆっくりと退場
途中、立ち止まって

野村　本当に穏やかな夜だったんですよ。
星と雲が絶妙なバランスでね。
空が僕を呼んだんです。
穏やかな夜に、空が僕を呼んだんです。

野村、ゆっくりと退場
照明、暗転

しばらく曲が流れてから
照明、舞台全体

礼

了